

思考力・判断力および表現力を育成する美術教育のあり方

～他教科との連携を図る美術の授業の可能性について～

千葉県柏市立第五中学校

教諭

高野 由美子（たかの ゆみこ）

※現在 柏市立中原中学校勤務

概要

「芸術表現とは、その場限りの楽しみではないか」という言い方は、生徒の『学び』というものを「将来の役に立つかどうか」という功利主義的な側面からとらえた言い方であり、美術表現というものを現実から遊離したもののようにとらえていると言える。一般に教科としての美術の存在意義については、このような見方が大勢を占めており、次第に肩身の狭い存在になりつつあるような気がしてならない。しかし、美術という教科の真の存在意義はそのように狭義で特別なものではないのだ。学校教育における美術表現とは、単に自己表現を追究することではなく、他者との関わりの中で幅広い表現活動を行っていく、自己の表現能力を高めていくという性格を持ちあわせているのである。また、表現活動を通して、自身の社会的存在価値を高め、「他者との関わり」を通して、「より豊かに生きること」を実感できる教科なのだと思う。そういう観点から美術教

育をとらえ直すならば、美術表現というものを美術の時間という狭い枠の中に閉じ込めておくことは、そうした美術の教科性を考えるならば間違いである。美術の授業は、様々な教科と関連づけをすることが出来る。美術で培った表現力が他の教科における表現につながり、反対に、他の教科における学習内容が、美術の表現活動にも生かされるのである。他教科の学習において、美術表現を活用することで「知識・技能」と「思考・判断・表現力の育成」のバランスを重視した授業が可能となり、生徒は美術の必要性を実感できるのだ。また、美術から他教科へアプローチすることによって、表現やコミュニケーション、創造性、情操など、多様な能力が一面的ではなく、学校教育全体の中で様々な観点から育まれていくのである。狭い枠組みにとらわれず、こだわりのない表現の中で生徒の幅広い可能性を培っていくこそ美術という教科の役割なのだと思う。



目次

1. 論題 思考力・判断力及び表現力を育成する美術教育のあり方
↳ 他教科との連携を図る美術の授業の可能性について↳
2. 序論
 - (1) 美術の教科性と表現活動について
 - (2) 美術における思考力・判断力の捉え方
 - (3) 「生きる力」と美術教育の関わり
 - (4) 他教科との連携を始めた経緯
3. 研究目的（仮説）
4. 他教科との関連教材の実践内容（四年間の実践から）
 - (1) 国語の言語活動との関連題材
 - (2) 英語の単語学習との関連題材
 - (3) 数学の線・円・六角形・立体との関連題材
 - (4) 総合的な学習の時間との関連題材
 - (5) 社会科地理との関連題材
 - (6) 道徳と美術との関連題材
5. 実践例（授業展開例）
 - (例1) 国語の言語活動との関連題材における授業展開
 - (例2) 国語（書写）との関連題材における授業展開
 - (例3) 英語の単語学習との関連題材における授業展開
 - (例4) 総合的な学習の時間との関連題材における授業展開
6. おわりに

1. 論題

思考力・判断力および表現力を育成する美術教育のあり方
「他教科との連携を図る美術の授業の可能性について」

2. 序論

(1) **美術の教科性と表現活動の意味について**

めまぐるしく教育改革が進んでいる現在、それぞれの立場の違いによって、美術教育に求められているものについての認識に大きなギャップがあるように思われる。なかでも、子どもの『学び』というものを「将来に役立つ教科か否か」という一側面からのみとらえて、「芸術表現とは、その場限りの楽しみではないか」という言い方は、極めて浅い捉え方である。

美術の表現活動の価値は、単に功利的な部分だけにあるのではなく、「目に見えるものや見えないもの(想像)や心・精神・感情など、形・色・材料で可視的・可触的なものを表現できる唯一の教科である」というところにあるのだと思う。ガードナーはその研究論文の中で「図工・美術での表現や創作は『言

語知』や『数理知』と同様に『空間知』や『音楽知』という〈知性〉を伸ばし、高める活動である」という説を発表しており、さらに、「図工・美術も〈知性〉を伸ばす活動である」「将来の職業と適性と関係している」と述べている。(注1)

(2) **美術における思考力・判断力の捉え方**

大阪教育大学付属平野中の池永先生は「指導と評価」の中で、ナイバーグの理論を引用して次のように述べておられる。「アメリカの教育学者ナイバーグの目標(評価)理論では、授業者が望む目標の質を①意図(intent)、②内容(content)、③感情(sentiment)の三つに区分している。③は学習により生じる心理的な変容のことである。理性ではなく感情に影響された思考・判断を意味している。したがって他の教科がイメージするような理性的、論理的な意味での『思考・判断』ではなく、むしろ直感的な要素の強いものである。美術のような感情を重視する教科では、このような意味での心理的変容こそを『思考・判断』と考えるべきであろう。」(注2) この考えを借りるならば、美術における「思考・判断」は「発展や構想の能力」ととらえ、授業者の柔軟な発想・思考によって柔軟に、かつ主体的に発展させて行くべきなのだと思う。

(3) **「生きる力」と美術教育の関わり**

美術科における「生きる力」は、問題解決能力や主体性だけに立脚したものではなく、教育課程を通して、感情や想像力といった豊かな心を育み、それが生活の中で生きて働く力となることが期待されるのである。創造することの価値に気づくことは、認知的な学習では得られない達成感や成就感につながり、社会における自己有用感につながるものであると思われる。

美術表現は、単に自己表現を追求することだと理解されやすいが、学校教育における美術教育は、個の表現にとどまらず、他者との関わりの中での幅広い表現活動の中で自己の表現能力を高めていくという性格も持ち合わせているのである。

従って、美術教育はその表現活動を通して、自分自身の社会的存在価値を高め、「他者との関わり」を通して、より豊かに「生きること」を実感できる教科なのだとと言える。豊かな人間性を持つ生徒を育成する上で美術教育の果たす役割は欠くことのできないものなのである。

(4) **他教科との連携を始めた経緯**

美術の授業は、様々な教科と関連づけをすることが出来る。美術で培った様々な表現が

佳作賞

他教科における表現につながり、反対に、他教科の学習内容が美術科の表現活動にも生かされるのである。

私は以前から他教科との連携ができないものかと考えていた。数年前、当時の勤務校で「英語と美術」をつないだ題材を設定したことがきっかけで、その考えを具体的に進めることができた。最初の内容は、美術の授業で表現した「流れのイメージ」というテーマの空想画を用い、英語の授業で「絵に表現した自分の思いを英文で書き、絵の写真に英文を添付してオーストラリアの学校にメールで紹介する」といったものであった。その実践から、他教科と一緒に取り組むことで生徒が制作した「一枚の絵」から幅広い活動が展開できるのだという可能性が見えてきた。その後、現任教校において、他教科の先生方の協力を得て、様々な連携題材で授業を展開することができた。美術の授業で実施した表現方法を他教科の中でどのように生かすことが可能か、他教科の学習活動を美術の中でどのように表現活動に生かすことができるのか、・・・どうしたら美術と他教科で学ぶ内容をそれぞれの栄養素として生かすことができるのかということを考えながら、それぞれの実践を試みた。

3. 研究目的（仮説）

(1) 他教科との関連題材を扱うことで「知識・技能の習得」と「思考力・判断力・表現力等の育成」のバランスを重視した授業が展開でき、生徒は美術の必要性を実感でき、意欲関心意識の涵養につながるのではないかと

(2) 関連題材の実践という美術科から他教科へのアプローチによって、表現やコミュニケーション、創造性、情操など、多様な能力が美術教育だけでなく、学校教育全体の中で様々な観点から広く育まれていくものになるのではないかと

教育改革の中で、現実問題として美術教育の存在が小さくなっている。教育課程という枠組みの中で、どんな存在感がなくなっているような感じを受ける。そのためか、美術教育がいかに生き残れるかという論点に走りやすい。しかし、日々生徒を前に美術を指導する私たちは、決して腰を引いてはならないのだと思う。なぜなら、現代の教育における「子どもの人間性の育成」ということを考えれば、美術教育の必要性は見えてくるからである。複雑な人間関係の中で押しつぶされそ

うな子どもたちの自我をどう支えていくか、を考えたとき、美術という学びの時間は絶対に必要不可欠なのである。私たち美術教師は、個々の表現活動や共同作業を通して、各教科との連携を図り、幅広い学びの場を提供することで、生徒の心が解放され、生きた心が回復するための一助となると考える。

4. 他教科との関連教材の実践内容（四年間の実践から）

(1) 国語の言語活動との関連題材

○読書感想とイメージ表現

〈1・2年〉（*例1）

○モノの作品を鑑賞（言葉にならない表現）

〈1年〉

○鳥獣人物戯画模写と物語創作（2年）

○イメージ表現と自分の詩「春に」

〈3年〉（*例2）

(2) 英語の単語学習との関連題材

○ネームデザインとアルファベット学習

〈1年〉（*例3）

○花の表現や鑑賞（作品）と単語学習

〈1年〉

○オーストラリア（アボリジニアート）

と英語教科書内容〈2年〉

○鳥獣人物戯画の模写と英文の感想

(姉妹都市グアム島との国際交流)

〈2年〉

円と立体の表現と作図〈1年〉

○エッシャーの世界と多角形〈2年〉

(4) 総合的な学習との関連教材

○各時代の建造物や仏像の鑑賞〈3年〉

○風神・雷神図模写〈3年〉

○修学旅行の思い出まとめの本

〈3年〉(※例4)

(5) 社会科地理との関連教材

○空からみる世界遺産の旅の鑑賞と

世界地理〈1年〉

○世界の美術史と世界の歴史〈1年・2年〉

日本の美術史と日本の歴史〈2年・3年〉

(6) 道徳と美術との関連教材

○漫画表現と手塚治虫の生き方〈1年〉

(3) 数学の線・円・六角形・立体との関連

教材

○切り紙と線と多角形・回転体

5. 実践例 (授業展開例)

(例1) 国語と美術との関連題材における授業展開〈1・2年〉

題 材 名	「自分が読んだ本の一場面の絵を描こう」ブックトーク&アート
時 数	国語：2時間扱い 美術：2時間扱い
表現材料及び留意点	イメージに合う紙や画材に合う紙を生徒自身に選択させることが重要である。特に使用する紙の色合いで全体のイメージが出て来るのでよく考えさせる。色々な描画材料の特色を理解し、その上で自分の思いに合うものを複数選択させる。カラージュ表現や摩登テクニクなどを自由に選択させる。
授 業 展 開	<p>〈1時間目 国語〉</p> <p>① 中学1年間に読んだ本の中から、自分が友だちに紹介したい本を決めさせ、ブックトークの目的を理解させる。聞いた人が読みたくなるような本の紹介を考えさせる。</p> <p>② ジャンルは問わないが中学生に薦められる本を選択させる。実物の本が見せられる手元にある本にする。絵本や挿絵の多い本は避け、図鑑や解説本など感想が書きにくい本もやめさせる。</p>

佳作賞

事後指導	評価規準	
<p>国語のブックトークのスピーチ後、生徒全員の美術作品を廊下に一斉に展示し、他のクラス作品も鑑賞させる</p>	<p>○ 読者の感動・印象・イメージを意欲的に伝えられたか ○ 自分の発想を大切にし、画面の組み合わせの工夫ができたか ○ モダンテクニクの表現技法を生かして本のイメージに合う配色を考え、美しい作品に完成できたか ○ 友だちの作品に関心を持って鑑賞することができたか。鑑賞ワークシートの記入がきちんとできたか</p>	<p>元の机の上にブックスタンドを置いて提示する。絵についての説明やその場面の朗読を入れる。</p> <p>〈4時間目 国語〉 本の紹介スピーチ（ブックトーク）をする</p> <p>「絵」を持って自分が読んだ本を紹介するが、その時は、原稿を見ないで紹介するようにさせる。本は、手元の机の上にブックスタンドを置いて提示する。絵についての説明やその場面の朗読を入れる。</p> <p>② 完成後台紙に添付し説明文を記入し、教室に持ち帰り、スピーチの準備に入る。</p> <p>① 本の内容が伝わるようにイメージを考えさせ、表現をさらに工夫し、仕上げさせる。</p> <p>〈3時間目 美術〉</p> <p>① 自分のイメージに合う「紙」を選択する。自分が表現したい場面のイメージをよく考え、「紙」の色を選択することがポイントとなる。</p> <p>② 紙に合う「描画材料」を選択する。また、モダンテクニク表現の見本から自分のイメージに合う表現のヒントを得ながら自由に発想し表現する。</p> <p>③ イメージを持つために「参考作品」を鑑賞する。今後の授業の流れを説明する。</p> <p>④ 本を持参して「本の紹介」スピーチ原稿を書き、絵にしたい場面を決めさせる。</p> <p>〈2時間目 美術〉</p>



「ネシャン・サーガ」



「赤き月夜に眠るもの」



「Itと呼ばれた子」

《生徒の感想》

○本の内容をよく理解していないと描けないので登場人物になったつもりで読んでいると話の重要な場面が分かって描きやすくなった。絵で表現することで本に深く入り込んで行けた。

○場面や人の気持ちを考えながら読むので「想像」するのは簡単だったが「絵」にするのが難しかった。読んでから見ると「あの場面」と分かるけど、読んでいない人が見たらよく分からないだろうと思い、本全体の雰囲気や伝わるように使う場面を工夫した。思い通りに人に伝えるのは大変だけれど、「絵」はたくさんの表現ができ、言葉以上に伝えられる気がした。

○絵の具やパステルを工夫したり、色紙で貼ったりした。ぼかしのコツをつかめると作っていてとても楽しかった。他の人の絵を見たらその人のイメージで本の感じが分かった気がした。

《考察》

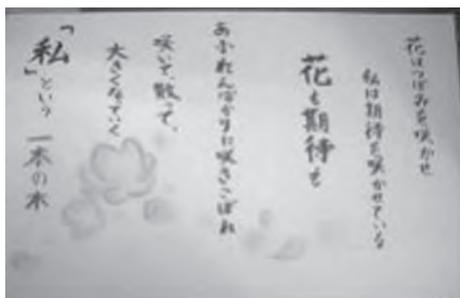
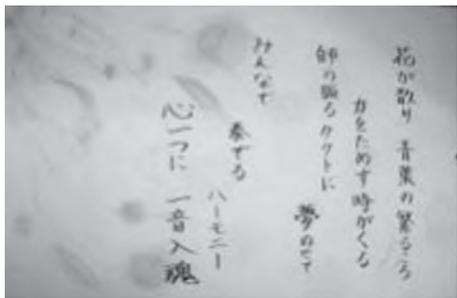
どんな作品にも言えることだが、殆どの生徒にとつて制作前は不安が先に立ってしまふことが多い。しかし、いざ始めて見ると生徒のエネルギーはそれを越え、次々と新しい発想で表現を工夫する。

「やれるかも知れない」「やってみよう」という気持ちにさせるのが教師の支援である。今回は表現の自由を示しながらも多くの表現のパターンを紹介したことで「これなら…」というイメージが掴めたようだった。国語の授業で「場面設定」が明確になっていた生徒は特に取りかかりが早く作業もスムーズだった。このように美術作品を国語の授業で「言語活動の題材」として扱ってもらえたことは相互に効果的であったと思う。今後は、表現の幅を広げさせるための方法と時間設定が課題と考える。

佳作賞

(例2) 国語(書写)と美術との関連授業の展開(3年)

題材名	時数	表現材料及び留意点	授業展開	評価規準	事後指導
詩の表現 自分の「春に」	国語：2時間扱い 美術：1時間扱い	自分にとっての「春に」の思いをどう伝えるのかよく構想を練らせる。自分の考えた「詩」に合う紙や画材を選択させる。最後は書写表現となることも意識させ、配置(レイアウト)も考えさせていく。墨で文字を入れたあとも絵画表現の追加が可能とし生徒のイメージを大切にす。	<p>〈1時間目 国語〉</p> <p>① 谷川俊太郎の「春に」の詩に描かれた気持ちを読み取る</p> <p>② 「春に」を参考にし、同じテーマで自分の「春に」の気持ちを詩で表現する</p> <p>〈2時間目 美術〉</p> <p>① 自分の詩をより効果的に見せる表現の図柄を考える</p> <p>② 表現する紙や画材、材料を検討、選択する</p> <p>③ 色や形、墨の配置も考え、表現の工夫をしながら彩色する</p> <p>〈3時間目 書写〉</p> <p>① 文字の配置やバランスを考え、筆を運びながら、墨で「詩」を書く練習をする</p> <p>② 絵の上に墨で清書する</p>	<p>○詩の内容を考えながら意欲的に表現に取り組めたか</p> <p>○全体のバランスを考え、豊かな発想で表現できたか</p> <p>○画材の特性を考え、美しい表現ができたか</p> <p>○友だちの作品に関心を持って鑑賞できたか</p>	<p>全員の作品を廊下に展示し、鑑賞をし合う</p>



○私は「詩」を美術で表現すると聞いて困惑した。私の詩は不安の中に希望もあるというものだった。不安は「灰色」で表現し、希望は「黄色」をメインにした暖色で表現した。また、不安といえばグチャグチャしたイメージがあったので波線で表現し、希望は日だまりのようなイメージだったので丸を描いてみた。最初は戸惑ったけれど、少し描いてみるとドンドンイメージが浮かんできた。人は気分によつて色を使い分ける、良い気分の時は暖色を思い浮かべ、悪い気分の時は寒色を思い浮かべる。また、形も使い分ける。この授業を通してこのようなことを知らず知らずのうちには学んでいることが分かった。

○自分の不安な気持ちの色や形で表すことで心のモヤモヤが少し晴れた気がした。また、作品を目にしたとき、その人の話を聞くよりもスツと心の中に入って来たような気がした。芸術家の絵があんなに人を引きつけるのは、きつと自分の思いや人生をその絵に精一杯ぶつけているからかなあと考えた。これからも、一つ一つ何かを作ったり、描いたりするときは自分の思いや、何を伝えたいかを精一杯表現できるように色々な工夫をしたいと思う。

最初は、どの生徒も自分の言葉から絵を発想すること、限られた空間の中にそれを閉じ込めるといふ活動は、かなり難しく感じた様子だった。しかし、国語の授業で「自分の思い」を明らかにする活動をしていたので美術表現の1時間是我を忘れ、時を忘れたかのようにならぬ世界で遊ぶ生徒の姿が多く見られた。「肩の力を抜いて思うがままにね」という励ましの支援にもかかわらず、生徒はこだわりの中でこのような美の世界もあるのだと自然に理解していたように感じた。ただ、短時間だったので今一步表現の幅を広げられなかった生徒もいたので、次回は最初にもっと思い切って表現してみよう働きかけを工夫していきたいと感じた。

佳作賞

(例3) 英語の単語学習との関連題材(1年)

題材名	時数	表現材料及び留意点	授業展開	評価規準	事後指導
はじめのアルファベット(自分のネームデザイン)	英語:1時間扱い 美術:1時間扱い	自分の名前をデザインさせる材料は自由に選択させる。各自、自宅からいろいろな材料を探して持って来させる配色やレイアウトも自分で自由に決めさせる。	<p>〈1時間目 英語〉</p> <p>白い紙に自分の名前をアルファベットで書いてみよう</p> <p>〈2時間目 美術〉</p> <ol style="list-style-type: none"> ① いろいろなコラージュ表現や絵画表現を鑑賞する ② 持参した材料の特徴を考えながら構想を練る ③ アルファベットの文字の形の特徴を考えながら、自分らしい模様を考えて描く文字が引き立つような背景などのデザインを考えて描く 	<p>○自分の名前文字の形に関心を持って意欲的に表現できたか</p> <p>○美しい配色で表現できたか</p> <p>○自由な発想で材料を効果的に使用できたか</p> <p>○友だちの発想や表現技法に関心を持って鑑賞できたか</p>	<p>全員の作品を廊下に展示し、互いの作品を鑑賞させる。文字デザインから自分のマークデザインへ発展させ、視覚伝達デザインの意味を考えさせる</p>



○色んな教科で共通した内容をそれぞれ
の教科で生かす活動は、一つの教科で
やらないところまでできたので色んな
ことが学べた。共通した内容でやると
楽しさが増すし、勉強にもなった。

英語でやった自分の名前をアルファ
ベットで書くということを美術でさら
にデザインするのはおもしろうそと
思った。こういう授業ならまたやりた
いと思った。本当に楽しかった。

○私は、英語も美術も好きだ。英語は読む
ことより書くことが好きだ。美術は何
かを作ったりすることが好きだ。だか
ら、この「ネームデザイン」はとても楽
しかった。またこのような違う教科で
共通の授業をやりたい。

美術で最も大切なことは、生徒の感覚
とか、自分らしさが出せるような題材の
設定であり、授業の組み立てである。中
学に入って初めての英語に対して、楽し
みでもあり、不安もあるはずである。し
かし、今回の題材である「ネームデザイ
ン」は、自分の名前をアルファベットで
表現することの格好よさを十分味わえる
題材であり、生徒たちの感性を刺激する
ものであったと思う。特にひらがなやカ
タカナ、漢字とは違う美しい24文字の形
を意識させ、自分で色々改造させる楽し
みを持たせるようにした。生徒は、英語
ノートには4本の横線の上に正しく書い
ていた文字を美術の授業では、文字の大
きさも変え、自由に配置して表現そのも
のを楽しませるようにさせた。文字を直
接描く生徒、切り抜く生徒、他の紙で
切り取って貼る生徒など、色々な表現が
飛び出してきたことが成果であったと思
う。今後はもっと立体的に表現を広げ、
「自分らしさ」を加えさせていけば、もっ
と生徒の思いが自由に表現できるのだと
思う。

佳作賞

(例4) 総合学習との関連題材(3年)

題材名	時数	表現材料及び留意点	授業展開	評価規準	事後指導
修学旅行「思い出の本」のデザイン	総合的な学習 全体5時間	ホワイトブックの使い方は自由とする。各ページ設定のみ指定するが、全体の構成・配置・表現方法は自由とする。使用する画材も自分で選択し、自分の思い出が自由に表現できるようにさせる。表紙のデザインは、京都・奈良のイメージを自分で自由に考え、表現させる。材料も学校にある紙類以外は各自に自由に準備させる。	国語(短歌作り) 家庭科(京都奈良の伝統の織りや着物文化) 社会(京都の地図) 技術科(伝統建築、木組みについて) 英語(思い出の英作文) 美術(全体の構成・表紙のデザイン) 総合の時間(見学場所の調べ学習)	○まよめの本作りに意欲的に取り組めたか ○本の使い方、構想を練ることができたか ○色んな材料を工夫し、美しく表紙のデザインができたか ○友だちの作品の工夫点などをしっかり鑑賞できたか	全員の作品を教室前に設置した机の上に展示し、互いに鑑賞させる。学校公開の際保護者の方々に修学旅行の報告として見ていただく。



○修学旅行のまとめでは、色々な教科が関わって手を抜けなかったもので、完成させるのに時間がかかって大変だった。でも、この活動を通して班の仲間と協力できていい経験になった。

○本という形で思い出に残すことは初めてだったので、作っていてとても楽しかった。表紙は修学旅行に行く前に作成したので、自分なりのイメージで京都・奈良をカラーージュした。

○最初、色々な教科で共通したことをやるのは、複雑で面倒だというイメージを持っていた。でも、いざ取り組んでみると全く複雑ではなく、楽しく取り組めた。

《考察》

今回のまとめの本は、自由な部分が多いためにかえって生徒が戸惑うことになりかねないので、生徒と一緒に全体計画を組み立てたことが全員の作品の完成につながったと思う。表紙のデザインは、色々な材料を生かすという点では、生徒の自由な発想が多く見られ、完成した作品が展示されたときにはとても美しい物となった。また、各教科の取り組み内容が充実していたので読み応えのあるものとなっていた。修学旅行が学びの場であるという意識を持たせるよい題材だったと思う。

佳作賞

6. おわりに

「先生、美術っているんな教科とつながってるね」生徒はこちらが意図的に組み立てたことを、敏感に感じ取り、嬉嬉と授業に参加していた。人は誰でも、何かひとつでも自分の力で作り上げ、それが認められると、自己存在感・有用感を持ち、生きる力となる。美術教師として多くの生徒と接し、実感していることは、どんな生徒にも固有の限らない力があるということである。他の場面で失った自信を美術の授業で取り戻せた生徒を沢山見てきた。それは、美術という教科の持つ大きな力、可能性であると実感する。生徒の感覚の鋭さは、教師の予想の範囲を著しく超えることが度々ある。だからこそ、生徒の可能性を信じ、伸ばしていく懐の深い題材を設定し、生徒が楽しめるような授業を展開せねばといつも思うのである。美術教育は、幅広く柔軟でなければならない。どんな場面やきっかけで一人の生徒の個性が開花するか分からないからである。美術表現とは、一定の物差しで測る必要のないモノなのだと思う。特に、無垢な表現は、自己意識など持たないもので、単に知識のない稚拙な表現かも知れないが、ハツと目を見張る原石の輝きがそこには

ある。それが、成長過程の中で様々な事実の関係性を学び、自分を知り、自己の感性として磨きがかかり、個性という輝きを放ち始めるのである。だからこそ、先人たちが作り上げたよいモノに接する機会を多く与え、価値を教えることが大切なのである。基礎・基本を学び、それをどう生かすかが本人の個性となっていく。意図的に且つ自由に表現できるチャンスをいかに与えて行けるかが教師の仕事なのだと思う。つまり、いかに「習得」させ、「活用」させるか、を教師自身が発想豊かに考え、実践することが重要なのである。

しかしながら、指導要領においても「感性を豊かにし」という表現が使われているが、具体的に、どのようなことが感性豊かになったといえるのかを明らかにしなければならぬ。「美しいモノに出会わせる」「物づくりを経験させる」などを個々に意味あるモノとし、それぞれを実践することが「感性を育む」というような予定調和的な発想に立つてはならないのだと思う。授業の中で育みたい目標を明確にし、生徒には、何を学び、どのように自分の生活に生かせるかを、より具体的に意識させることが最も重要なことなのである。さらに、私は、取り組む態度（主体性・集中力・こだわり・試行錯誤・敬い・自己確認・協力e t c.）、感じる力（ひらめき・味わい・共

感・印象・好み・美意識e t c.）、考えを練る力（発想・思考力・判断力・批判力・評価力・探求心・分析力・見通す力・応用力・空想力e t c.）、表現力（描く・作る・巧緻性・スケッチ力・コミュニケーション力e t c.）のように、美術科で育むことが期待できる「感性」や「知性」を具体的に簡潔な言葉で生徒に示し、どの学習でどのような能力が使われる育まれるかを意識させ、授業を通して「感性」や「情操」を豊かにする様々な能力が育まれることを伝えていくことが重要であると考えている。造形教育の真のねらいは、「生徒の資質や応用力の根幹となるようなもの」と言われる。だからこそ、数少ない作品だけを見て生徒の可能性を決めつけたりせず、多くの題材に取り組ませる機会を持つことにより、幅広く個々の生徒の可能性を見だし、それを伸ばすためのアドバイスをしていくことが大切なのだと思う。

題材によっては同じ生徒でも全く違う表現をすることがあるし、同じ題材でも生徒によつて全く違う表現をすることを予想し、幅のある授業計画を立てることが必要だと考える。本実践は、他教科との連携の可能性を追究しながら、生徒の持つ多様な可能性を伸ばすという試みであり、十分納得のいく成果が得られたとは言いが、今後の教科の方向

性を模索する上では大きな意味があったし、これから教科を実践していく上で一つの土台となるものと感じている。教科としての美術は、単に楽しみに流されず、社会の中で豊かに生きていくために大切な感性と創造力、ビジュアル社会における重要な表現力を培うという役割を担っている。従って、個々の生活の中で生きて働く確かな目標や学習内容を明らかにして、確かな指導を積み上げ、意味のある教科としていかなければならない。美術でしか学べず、身につけられないもの、美術ならではの創造力・知識・技能・資質・創造力を開発し、身につけ、伸ばすものは何かという「美術の教科性」を明確にして教育をしていかなければと考える。

表現とは、自己伝達である。他者との対話であり、自分との対話である。他教科での「伝える」という意味と美術との違いがそこにあると思う。曖昧、漠としたものを伝える手段として美術表現は人の内面を映し出すという意義を持つ。教科を越えた教科性のようなものもそこにあるのだと想う。今回の新指導要領における美術の目標は、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的な能力を伸ばし、美術文化についての理解を深め、豊

かな情操を養う」(注3)とある。さらにその解説において、「美術の基礎的能力は、基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力等を含むものであり、その育成には、生徒の主体的な学習活動の中でこれからの能力が関連しながら、十分且つ有効に働くようにすることが重要である」(注4)と書かれている。また、総則、指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項には、「各教科の指導にあたっては、生徒が学習内容を確実に身につけることができるよう、学校や生徒の実態に応じ、個別指導やグループ指導、繰り返し指導、学習内容の習熟課程に応じた指導、生徒の興味・関心等に応じた課題学習、補充的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れて指導、教師間の協力的な指導など指導方法や指導体制を工夫改善し、個に応じた指導の充実を図ること」(注5)とある。昨今、経験不足が問題視されている生徒ひとりひとりに創作の喜びを感じさせるためには、何といっても「より多くの作品に触れ、幅広い作品を行っていく」ことが重要であると考ええる。

しかし、週時数が限られている美術の授業では、時間を有効に使い、積極的に生徒の意欲を喚起し、活動を促しながら、結果的に基礎基本の定着を図ることができるという『石二鳥』の効果を考え、題材を設定しなければ

ばならない。今回の、他教科との連携も、様々な条件の中美術という教科の目標を達成させるための可能性を広げる一つの方法だと考えている。常に生徒の感性を育むことができる新しい題材を考え、生徒に示していくことが美術教師としての自分の役割だと思っっている。自分が計画的に提示した題材であっても、生徒のエネルギーは想像の枠を越え、思いも寄らぬ表現を見せてくれることがあり、驚かされる。そんなときは、本場に『生徒に教えられた』という思いを素直に持ち、こだわりを捨てて評価することになっている。これからも、生徒たちのあふれる才能を受け損なうことのないよう、教師としての幅広い力量を身につけていこうと思う。

(注1) ハワード・ガードナー「多元的知能の世界
…M―理論の活用と可能性」(文教出版)
(注2) 池永真義「指導と評価」より
(注3) 中学校学習指導要領 美術 目標
(注4) 中学校学習指導要領解説美術編 美術科の目標
(注5) 中学校学習指導要領 総則
指導計画作成に当たって配慮すべき事項